

い。1978年のその量は400mmと推定される。現在北麓で利用されている地下水の量は年間1,500万m³で、この量は流出高にして約40mmに当り、推定涵養量の約10%である。

(安藤久男)

参 考 文 献

- (1) 北海道開発局(1970): 営農用水対策調査“藻琴山麓地区”
- (2) 北海道開発局(1975): 営農用深層地下水調査“開陽地区”
- (3) 北海道開発局(1979): 営農用深層地下水調査“東藻琴地区”
- (4) 道立地下資源調査所(1980): 水理地質図“北見”
- (5) 道立地下資源調査所(1981): 水理地質図“斜里”

14. 支笏湖周辺

(1) 地形・地質

支笏湖は、札幌市の南方約30kmに位置する長径約12km、短径7kmの湖で、その湖面標高は約250mである。この湖は、更新世末期にできたカルデラ湖で、カルデラ形成に伴って放出された大量の火山噴出物(溶結凝灰岩、軽石流堆積物など)は支笏火山噴出物と呼ばれ、本地域の基盤岩である新第三紀の火山岩、火山碎屑岩などを覆って湖の北東～東～南西方向に広く分布している。

支笏湖の周囲には、樽前山(標高1,024m)、風不死岳(標高1,103m)、恵庭岳(標高1,320m)などの新しい火山がそびえており、樽前、恵庭の両火山は現在も火山活動を続けている。また、樽前山は同火山起源の火山碎屑岩よりなる広い裾野をもち、さらに東側には同山起源の降下軽石堆積物が支笏火山噴出物を覆って広く分布している。湖の北西側には、新第三紀の火山岩、火山碎屑岩類が分布している。

カルデラをとりまく山地(外輪山)の地形は上記の地質をよく反映しており、支笏、樽前火山噴出物の分布する北東～東～南西側は山麓部の傾斜が緩い典型的な火山山麓地形を呈するのに対

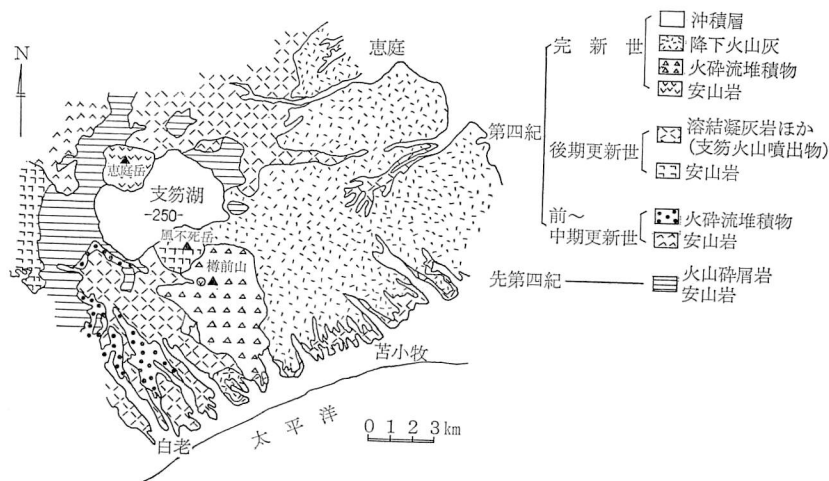


図 2-1-34 支笏湖周辺の地質図
(60万分の1北海道地質図⁽¹⁾を一部改変)

し、北西側は起伏の大きい急峻な地形を呈している(図 2-1-34)。

(2) 地下水

支笏湖外輪山の北東～南西麓には、広大な緩傾斜地が存在する。これらの地域のほとんどは林地であり、林業開発以外の開発はほとんど行われていない。このため、本地域の地下水利用はほとんどなく、地下水の賦存状況についても不明な点が多い。

支笏湖周辺の緩傾斜地を構成しているのは主として支笏火山噴出物で、土居⁽²⁾によれば、外輪山南麓で最大 100 m の厚さをもつとされており、山麓一帯で相当な厚さを有していると考えられる。本地域の支笏火山噴出物については、山口ほか⁽³⁾が「溶結凝灰岩は難透水層を形成しているが、部分的には粗しょうな岩相を伴い、他に浮石層などの粗しょうな噴出物を伴っているので局部的に透水層となり、小規模な帯水層な形成している」と述べており、あまり大きな期待はかけられないとしても開発の余地は存在するものと考えられる。

(谷岡健則)

参 考 文 献

- (1) 北海道立地下資源調査所 (1980): 60 万分の 1 北海道地質図
- (2) 土居繁雄 (1953): 5 万分の 1 地質図幅「白老」・同説明書, 北海道立地下資源調査所
- (3) 山口久之助・二間瀬瀧・小原常弘・国府谷盛明・早川福利 (1963): 北海道水理地質図幅「苫小牧・室蘭」・同説明書

15. 駒ヶ岳周辺

(1) 地形・地質

駒ヶ岳は道南の渡島半島にあり、噴火湾に面してそびえる標高 1,140 m の活火山である。駒ヶ岳の山体はほぼ完全な円錐形を保っており、山体の周囲には緩傾斜の広大な裾野をもっている。

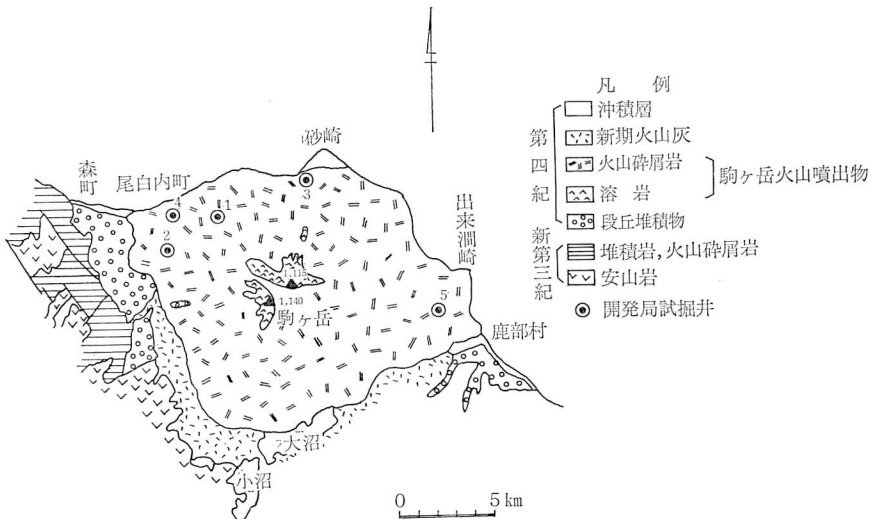


図 2-1-35 駒ヶ岳地域地質図
(20 万分の 1 北海道地質図⁽²⁾を一部改変)